

Nagatsuka Keishi

長塚圭史

劇作家・演出家・俳優

黄表紙と演劇は如何にして
出会うことができるのか。

「この建物に来て、私が直感した
古典籍と演劇を繋げられる可能
性が大きく一つあった。時を越えて
今もここに現存している、多くの
人の手に取られ、読まれた、古典
籍そのものだ。この時間と、手垢
と、記憶と、思考と、時代とが詰
まったこの一冊の古典籍。」

——長い実験を経て、長塚圭史と
黄表紙が織りなす幻想世界が、国
文学研究資料館の閲覧室に立ち
上がる。

AIR就任期間 2017年10月~2021年3月

東京都出身。1996年「阿佐ヶ谷スパイダース」を結成、作・演出・出演の三役を担う。2017年より劇団化。2004年、芸術選奨文部科学大臣新人賞、2006年、読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。2008年、文化庁新進芸術家海外研修制度にて1年間ロンドンに留学。帰国後の2011年、ソロプロジェクト「葛河思潮社」を始動。また17年に新ユニット「新ロイヤル大衆舎」を結成。近年の主な作品に「セールスマンの死」「イヌビト〜犬人〜」「常陸坊海尊」「桜姫〜燃焦旋律隊殺於焼跡〜」「イーハトーボの劇列車」「ハンクマン」など。出演作に「シンウルトラマン」「海辺の映画館-キネマの玉手箱-」。TFM「yes!〜明日への便り」(ナレーター)など積極的に活動。2021年より神奈川芸術劇場芸術監督に就任。

長塚圭史 紹介ページ →
https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/nagatsuka/index.html





国文学研究資料館の研究者であるアリモトトモコは同館閲覧室へと飛び込んだ。敬愛する戯作者山東京伝の幻の黄表紙作品の草稿を、かつての同僚であり恋人でもあったアダチから、ある契約の元に入れて入れたからだ。草稿には偽りなく未知なる京伝の世界が広がっていた。

他の閲覧者がいるにも関わらず感動のあまり問絶するトモコ。契約を遂行するまではまだ譲渡するつもりも読ませるつもりもなかったアダチが閲覧室に逃げ込んだトモコを追ってくる。押し問答する二人。

そこへ作業着姿の中年男が小さな扉から躍り出て、トモコの手から草稿を奪い取るや否や、書棚の奥へと消えていく。トモコは今の中年男こそ山東京伝ではないかと後を追う。アダチもトモコを追いかける。そして閲覧者たちは然るべき静けさ求めてトモコとアダチを追いかける。

果たして閲覧室の時間はねじ曲がり、過去と現在のは混濁し、山東京伝の世界が濃密な読書空間と戯れ始める。

ものがたり



長塚3

2020年 2月29日(土) 2回公演
15時開演 (16時開演) 16時開演 (17時開演)

お申し込みは2回公演のいずれかからさせていただきます。
お申し込み後、両公演とも開演は開演前となりますのでご了承ください。
16時公演の後、国文学研究資料館大会議室にてアフタートークあり。

江戸時代の絆を纏めた山東京伝と
彼に惹かれる戒る現代の女の幻想劇場

KYODEN'S WOMAN

～アナクロニズムの夢～

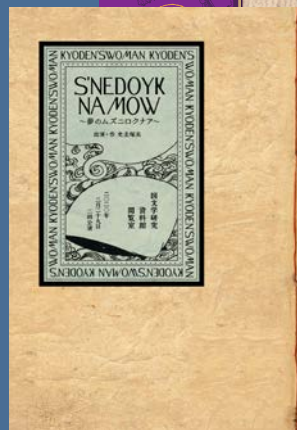
作・演出 長塚圭史

舞台監督 川口真人 | 空間・衣装 長峰麻貴 | 音響 國府田典明
出演 大鶴美仁音・岡部たかし・坂本慶介・高木真・土屋佑香・引間文佳・李千鶴

お申し込み先 <https://entry-service.jp/nij/nshonhaku>
お問い合わせ nij_larts_initiative@nij.ac.jp

主催 国文学研究資料館

長塚5



パンフレット

黄表紙をモチーフにしたパンフレット、ポスターやパンフレットのデザインには、山東京伝作のデザインブック「小紋雑話」(65頁)等がモチーフとして使われた。

演劇 長塚圭史・演出「KYODEN'S WOMAN ~アナクロニズムの夢~」(2020年)

黄表紙と戯れる幻想世界

「今、目の前にある古典籍は、どのような人々によって作られ、そして売られ、あるいは贈られ、あるいは拾われて、ここまでやって来たのだろうか。」

長塚さんの関心は、いつもそこにありました。古典籍が内包する時間を深く探るために選んだのは、多くの人々が制作に関わった「版本」、つまり、板木が彫られ、刷られ、製本され、売られた書物でした。

数人の俳優陣と研究者と共に、行ったワークショップでは、

2020年2月29日、国文学研究資料館の閲覧室を演劇空間に見立て、役者と観客が歩き回りながら展開する形式での上演を予定していたが、COVID-19の感染拡大を考慮して延期。同年8月30日に、朗読劇の形で上演された。

出演 大鶴美仁音・岡部たかし・坂本慶介・高木真・土屋佑香・引間文佳・李千鶴／三味線演奏 柳家小春／空間・衣装 長峰麻貴／音響 國府田典明／舞台製作 唐崎修／舞台監督 川口真人／映像作成 松澤延拓／記録撮影 エヴァシユウ



「KYODEN'S WOMAN
～アナクロニズムの夢～」
朗読公演上演風景

朗読公演の様子。本人役の岡部たかしが、戯曲のト書きを朗読しながら、当初想定されていた上演方法をも観客に想像させた。冒頭に登場する「古典籍をめぐる」動作は、ワークショップで何度も検討された身体性を活かし、薄い紙を書物に見立てて行われている。朗読バージョンでは新たに三味線演奏と歌も加わった。

岡部 「ちなみにこれは何を読んでるんですか？」

閲覧者 「黄表紙です」

岡部 「はっ！」

閲覧者 「黄表紙です」

岡部 「何拍子？」

閲覧者 「黄表紙です」

岡部 「え？だから何拍子？はい僕はこの何拍子って聞き返すのはですね、正直どうかと、長塚さんにも一応相談はしたんですけども、ちょっと試しに言ってみる。ことにしたんですね。どうですか黄表紙って言われて、え？何拍子？っていう問答は」

黄表紙が職人たちによって作られ、売られるまでの工程を描いた黄表紙を手がかりに、一冊の書物が作られる過程を身体で表現し、理解を深めてゆきました。

「黄表紙」とは、江戸時代中～後期にかけての三十年間、江戸の知識人たちにより作られた、滑稽な絵入読み物です。作中にしばしば登場して、内情を明かしたり創作人物と交わったりする黄表紙の「作者」の在り方に関心を抱いた長塚さんは、江戸を代表する戯作者・山東京伝（一七六一～一八一六）に注目しました。

京伝の黄表紙を身体化したり、書物を読むという行為に迫ったり……いくつもの実験を経て、黄表紙という存在そのものを理解しながら、最終的にたどり着いたのは、古典籍を偏愛する研究者への好奇心。

架空の黄表紙研究者との、現実と虚構が入り混じる長い問答のさ中、閲覧室の地下書庫から、古典籍が内に秘める「時間」や「物語」と共に山東京伝が姿を現し、「おおむね黄表紙」たる幻想世界が立ち上がったのでした。



百合 「いらしてましたか？」
京伝 「うん。なんや知らんけど小さい扉からこつち出て来たわ。せやけどどこにゲッターやなあ。嫌いやわあ。雰囲気。ものつすごい寂しい。閲覧やて。ポクの本読むとこちやうでこ」
百合 「でもここでああして大事にしててくれているんでしょう」

「KYODEN'S WOMAN
～アナクロニズムの夢～」
舞台空間写真(2020年8月)

閲覧室を4つの空間に分け、第一場～四場の舞台とする当初の計画はそのままに、朗読劇用にブラッシュアップした舞台美術。京伝の黄表紙やデザインブック(62～65頁)に登場するモチーフが、書棚や壁にちりばめられ、京伝の作品世界と現実が交錯する様を表す。閲覧室には、撮影した古典籍の写真のマイクロフィルムを投影して閲覧する機械が備わるが、そのスペースにて、国文学研究資料館の存在意義についての問答が繰り広げられる予定だった(公演時は着座のまま上演)。

ワークショップを経て

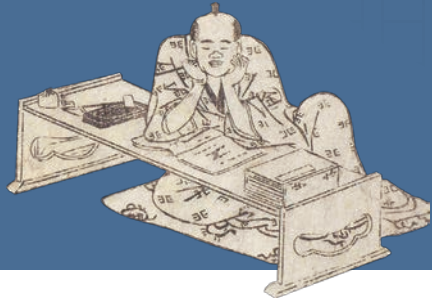
数人の俳優たちと研究者とで、本をひらく身体性、そして黄表紙という存在に対して、古典籍のテクストや絵を手掛りに、さまざまな方向からアプローチを試みた。

二〇一九年二月のワークショップで行った、架空の黄表紙研究者に対して、でたらめまじりのインタビューを行うという即興劇は、「KYODEN'S WOMAN」の構想に至る大きなきっかけとなった。

ワークショップ参加者
菊池明・坂本慶介・菅原永二・成河・高木稟・引間文佳・藤間爽子・八十田勇一・李千鶴（敬称略）



①古典籍の下隅に付着している過去の手垢に注目し、古典籍をひらく身体性を追求することに。②京伝の黄表紙「心学早染判」に登場する悪魂踊りに挑戦。
③京伝の黄表紙「江戸生艶氣樺焼」を素材にした習作戯曲「江戸生艶氣樺焼」を演じる。④黄表紙を作る職人の動きを身体的に表現した。



「KYODEN'S WOMAN」公演映像
<https://youtu.be/5WXIzMPRVE8>



「KYODEN'S WOMAN」ドキュメンタリー映像
https://youtu.be/72GQ_TygED4



長塚氏による習作戯曲「江戸生艶氣樺焼」
https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/nagatsuka_pilot_kabayaki.pdf



古典インタプリタ日誌（ワークショップ詳細）
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#nagatsuka>



長塚 12



たなくひあはせ
『手拭合』

山東京伝編・画
天明4年(1784)刊
中本 1冊

「たなくひ」は手拭いのことで、新案のデザイン79種を彩色刷りで掲載。歌合など宮廷風伝統行事のパロディとして行われた催しの図録化というスタイルをとる。大名の子弟や吉原の遊女といった多様な身分の人物が、デザインの出品者として名を連ねており、若い京伝の交遊圏がうかがえる。図版中央のデザインは、舞台の幕の隙間から客席を覗く滑稽な顔。この特徴的な鼻は、京伝が後に戯作中で用いたことから、後年「京伝鼻」と称された。(有澤知世)

長塚 13



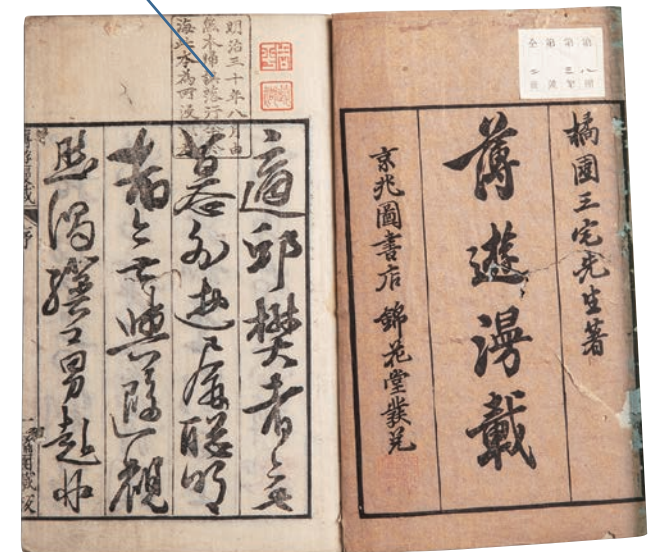
きんきんせんせいぞうかのゆめ
『金々先生造化夢』

山東京伝作・北尾重政画
寛政6年(1794)刊
中本 3巻1冊

『金々先生栄花夢』(96頁)の後日談。金々先生が茶漬飯を食おうと煮花をしかけたまま眠り、夢中で出会った仙人に、一杯の茶漬けができるまでのあらゆる働きを見せられる。『金々先生栄花夢』が洒落本的な世界を描くのに対し、教訓的な作風の本作は、寛政の改革以降の戯作界の動向を映し出す。狂言回しの「金々先生」は、『手拭合』(61頁)以後、戯作をとおして戯作者・京伝のイメージが定着した「京伝鼻」で描かれ、作者像を重ねて読むよう読者に促す。(有澤知世)



長塚 11



はくゆうまんさい
『薄遊漫載』

三宅橘園著
文化11年(1814)刊
中本 2冊

朝鮮通信使と会うための旅の漢文体紀行文。著者が各地で文人と交遊した様子や、多数の漢詩を収める。文化8年2月27日に京を出発、姫路や岡山を經由し、5月1日に対馬着、朝鮮通信使たちと交友する。長崎へも足を延ばし、7月29日に帰着。本書には、旧蔵者・内田遠湖(明治~昭和前期の中国哲学者)によると思われる印「明治三十年八月由熊本帰誤落行李於海此本為所浸湿者」が捺されており、彼が本書を海へ落として浸みを作ってしまったことを伝える。(有澤知世)



いなずまびょうし こうへん
『稲妻表紙後編』
ほんちようすい ぼだいぜんてん
本朝醉菩提全伝』
山東京伝作・歌川豊国画
文化6年(1809)刊
半紙本 6巻6冊



一休禅師の伝記を大枠とし、『通俗醉菩提全伝』など、多様な先行文献に拠りながら、泉州堺高須の名妓「地獄」などの人物が絡む複数の挿話から構成する読本。装丁や口絵にも工夫が見られ、例えば「臭皮袋図」は、美人画をめくると下から髑髏図が現れる仕掛けで、「どのような人間も、骸骨(=死)を抱えて生きている」という一休の教えを印象的に示す。この髑髏図は『解体新書』の図に拠ることが指摘されている(『月岑稿本増補浮世絵類考』)。(有澤知世)



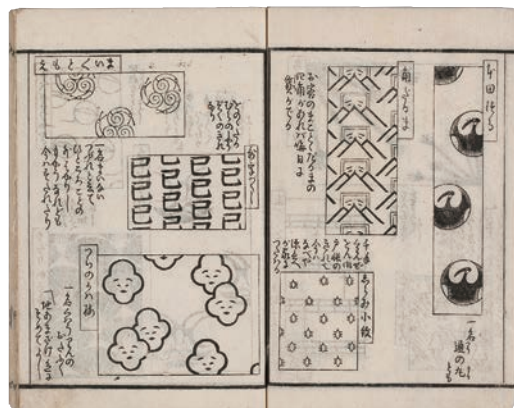
あくだまこうへん
『悪魂後編』
にんげんいつしうむなざんよう
人間一生胸算用』
山東京伝作・画
寛政3年(1791)刊
中本 1冊

人間の腹の中には一国があり、心と気がそれを治める。無名屋無次郎は、「心」正しく真面目な男だったが、「気」が謀反を起こして「心」を追い出し、「目」や「口」や「耳」と共に吉原等で好き放題、無次郎の立場を危くする。隣人の京伝は縮んで無次郎の体内に入り、迷子の「心」を見つけて元へ戻す。「心ここにあらず」「気がそれる」などの慣用句を擬人化して洒落る手際が見どころ。作者京伝が狂言回しとして草双紙の慣習などについて述べる点も興味深い。(有澤知世)



てんどうだいふくちよう
『天道大福帳』
ほうせいどう きんし
朋誠堂喜三二作・
きたあまよし
北尾政美画
天明6年(1786)刊
中本 3巻3冊

人間の善行が金銀となって天上へ上がり、悪行は火や焼味噌となってその金銀を減らす。勧善のため、天道のぬか星が人間を熊手で操作した結果、「仮名手本忠臣蔵」のドラマが生まれたというこじつけ。天道が人間を操るという趣向は、その後の黄表紙に影響を与えた。各巻絵題簽(絵と書名を印刷し、表紙に貼付けた小紙)を残す本書は、黄表紙らしい書物のスタイルを伝える。挿絵担当の政美は、後に『略画式』シリーズ(43~45頁)などを描く鋳形蕪斎。(有澤知世)



こもんがわ
『小紋雅話』

山東京伝作・画
寛政2年(1790)刊
小本 1冊

小紋図案集の形をとり、京伝案じの滑稽なデザインを集めた見立て絵本。見立てとは、異なるものを連想で結びつけること。たとえば「丸に鶴」のようなデザイン(図版右)は当時江戸屈指の地本問屋・鶴屋喜右衛門の商標を思わせるが、「本田つる」「一名通の丸とも」という書入れを読むと、本田髷(細い髷を高く結う、通人が好んだ髪型)を上から見た図であると気づき、その瞬間に笑いが生じる。浮世絵師北尾政演の顔も持つ戯作者京伝の魅力を堪能できる作品。(有澤知世)



きみょうずい
『奇妙図彙』

山東京伝作・画
享和3年(1803)刊
小本 1冊

全丁文字絵を主とした見立て絵本。「人丸」や「ヘママシヨ入道」など、昔ながらの文字絵を示した上で、「新法」として自身の新案を掲載、詞書で見立ての意を示す。図版は「おいらん」の文字を花魁の姿に見立てた箇所。配列の方針の読み解きが眼目であり、また困難な点であるが、たとえば「おいらん」の次は若い遊女である「新造」と、遊女に仕える少女の「禿」、さらに少女の遊具である「籬」と続き、連想で世界観が展開する。(有澤知世)



きんせい きせきこう
『近世奇跡考』

山東京伝著・喜多武清画
文化元年(1804)刊
大本 5巻5冊

いにしへの文物、芸能などについて、文献や古画を用いて考証した随筆。寛政の改革の際、洒落本三作を執筆した咎で処罰された京伝は、知識人の間で流行した尚古趣味の機運に乗り、後半生の情熱を考証活動に注いだ。彼の関心は、当時の正史には記され難い近世初期の市井の風俗や芸能にあり、浮世草子や古画等を活用して考証を行う点に特徴がある。また、引用資料の提供者が明記されていることから、その成果は彼の周辺の知識人らとの協力関係に支えられていることが知られる。(有澤知世)



こつとうしゅう
『骨董集』

山東京伝著・喜多武清/歌川豊広等画
上・中巻 文化11年(1814)刊、
下巻 同12年刊
大本 3巻4冊

『近世奇跡考』に次ぐ考証随筆で、近世初期のみならず、中世の文物・風俗についても考証を加える。文化10年の冬に本書上・中巻の稿を完成させた京伝は、この年より戯作作品の序文に「骨董集の著述のいとま」などと記し、考証に情熱の多くを傾けていたことを示す一方で、その成果を合巻や読本といった戯作での知的遊戯の材としている。文化13年に京伝が急逝する直前まで書き続けられ、「骨董集と討ち死にした」と曲亭馬琴に称された。(有澤知世)



しんべんきんべいばい
『新編金瓶梅』

おいていばきん くにやす くにまろ
曲亭馬琴作・歌川国安・国貞画
天保2年(1831)～弘化4年(1847)刊
中本 10冊80巻

中国明代の小説『金瓶梅』を、『水滸伝』などに抛りつつ、舞台を室町時代の日本に移した合巻。合巻とは、黄表紙が敵討物の作風に傾き長編化した後に登場した草双紙の最終形態で、美しい装丁や、推理小説的性格を獲得してゆく。草双紙は、絵と文が一体となった文芸であるが、長編化するにつれ情報量が増え、空白を埋め尽くすほどの緻密な印刷に、当時の技術の高さがしのばれる。展示箇所右側のページが、板木の左面に相当する。(有澤知世)



しんべんきんべいばい
『新編金瓶梅』板木

(第一篇 8丁表・8丁裏に相当)

合巻『新編金瓶梅』の板木。版面が、後世盆の背として生かされている。木版印刷で作られる草双紙は、草稿・版下が出来た後、彫師が板木を彫り、摺師が摺り、丁合(ページを揃える)し、針と糸とで製本するなど多くの行程を経て店頭と並ぶ。草双紙は袋綴じ装丁であるため、一枚の板に、背中合わせの関係にあたる異なる場面が彫られている。(有澤知世)

小論文

黄表紙と戯作者京伝の魅力的な陰影

Arisawa Tomoyo

有澤 知世

国文学研究資料館
特任助教

安永四年(一七七五)から文化四年(一八〇四)にかけての三十年間、江戸で出版された絵入りの読み物がある。表紙が黄色なので、「黄表紙」と呼ぶ。

紙面はほぼ絵が占め、余白に簡単な詞書が記されている。

内容はナンセンス極まりなく、一例をあげると、人の噂になるほどの色男をうらやましく思った、醜男で大金持ちの主人公が、美しい女性たちに一目ぼれされる、モテ過ぎて男たちに嫉妬されるなどの「色男あるある」を、大

金を投じて自演する話(山東京伝作・画「江戸生艶気蒲焼」)などがある。

大抵十丁〜十五丁(十五丁は十五枚の紙を袋綴じにした冊子ということで、三十頁にあたる)程度の短編であるため、ストーリーを読み解くというよりは、場面ごとに施された趣向を楽しむ。

こういった特徴をもつ黄表紙は、漫画の先祖、江戸時代におけるポップアートとして紹介されることもあるが、その魅力はもっと複雑なところにある。

まず黄表紙の作者は、本業を他に持つ知識人である。

たとえば黄表紙の元祖『金々先生栄花夢』(96頁)の作者・恋川春町は、駿河小島藩士・倉橋格といわれつきとした身分と名前がある。

十八世紀に入って出版システムが整備されたことも手伝い、新興都市であった江戸で、独自の文化が熟し始めた。その担い手は、高級武士や裕福な町人

者であった。

このように、文化人らのサロンで才能が見出され、遊びの内容が出版されてゆくという文化構造が成立していたおおらかな雰囲気の中で生まれた華が、黄表紙だった。そのため、同じ文化圏内にいなければわからない噂話、そして彼らの中で共有されている教養や美意識がちりばめられており、限られた大人の読者だけに赦される愉しみ方があったのだ。

ただ、その一方で、内輪ネタや隠れた知識がわからずとも、絵を読み解いて楽しむことはできるし、地口(ダジャレ)で笑えば良い。

そもそも黄表紙のルーツは、子どもへの年賀として贈られる簡素な絵本・草双紙である。草双紙は、「漉き返し」と呼ばれる再生紙を用いた廉価な書物であり、黄表紙もまた、その体裁を自覚的にとり続けている。正月用に出版されてすぐに消費されてしまうものであるため、時事ネタが好まれ、また、祝儀性が重

といった知識層であり、社会的な立場を持つ彼らは、「本業」を離れた仮の名を使って文芸に遊んだのだった。当時生まれた新しい文芸のひとつが、黄表紙である。

和歌のような正道ではない、脇道に逸れたそれらの新興文芸を、彼らは正道への遠慮と、気恥かしさを込めて「戯作」と称したが、実際は、彼らが持つ知識を縦横無尽に使った知的遊戯であり、同程度の知識人同士の交遊の中で育まれる性格を持つ。

一例をあげると、手拭いの新奇なデザインが掲載される『手拭合』(61頁)は、歌合などの宮中行事のパロディとして行った「手拭合の会」の記録という体裁をとっている。

本書の絵を描いた北尾政演は、後年戯作界にその名を轟かせる山東京伝であるが、まだ若き絵師だった彼を後援し本書を刊行せしめたのは、デザイナー出品者として巻頭に記される「雪川公」、つまり出雲松江藩松平宗衍の御曹司・衍親をはじめとする貴人た

んじられた。

黄表紙は、そんな自意識に満ちた徒花である。したがって、時事性が行き過ぎ、幕政を茶化す作が流行して取り締まられると、戯作界を担ってきた武家作者たちは、あっさりそれを手放してしまったのだ。

ところで黄表紙には「作者」がしばしば顔を出し、内情を述べたり、狂言回しを演じたりする

『手拭合』で登場した奇妙な鼻の男の顔は、『江戸生艶気蒲焼』などの黄表紙作品でも使われ、徐々に戯作者・京伝を示すアイコンとなるが、その顔が多用されるのは、寛政の改革以降、戯作界を担わざるを得なくなった一町人の京伝が、紙煙草入れ店を開業し、「本業」を持つ戯作者像を自ら創出しようとした模索した時期に重なる。

俗文芸の代表格である黄表紙と、江戸戯作の第一人者・山東京伝。どちらも一見親しみやすく華やかで、その実、陰影に富んだ魅力を持つ存在である。

長塚圭史「KYODEN'S WOMAN ～アナクロニズムの夢～」

～“戯作的”中央線文化が育んだ「ないじえる芸術共創ラボ」～

延江 浩



Profile

延江 浩 Nobue Hiroshi

1958年東京生まれ。TFMゼネラルプロデューサー、作家。小説現代新人賞、アジア太平洋放送連合ドキュメンタリー部門グランプリ、日本放送文化大賞グランプリ、放送文化基金最優秀賞、日本民間放送連盟エンターテインメント部門最優秀賞など。

吉祥寺の森本病院で生まれて以来、中央線沿線に住み続けている僕は、友部正人さんの『本道』の歌詞にぐっくる。
その歌詞の一節とは、♪ああ中央線よ空を飛んで／あの娘の胸に突き刺され♪

中央線文化でも西端の立川はまさに多士済々だ。

ディレクター時代、コメントをいただいていた作家の三浦朱門さんや詩人の清水哲男さんは立川高校出身だし（先日村上春樹さんのラジオ番組に出演された）ゴリラ研究者で前京大総長の山極壽一さんは隣の国立高校、音楽界なら志野清志郎は立川で反戦意識を養い、ユーミンは昭和記念公園となった横田基地にある門にちなんで自身の青春時代を歌っている（『LANDRY-GATEの思ひ』）。

かつて沿線には米軍将校の家が建ち並び、夏になればB Dシャツにバミューダパンツ姿の少年たちが遊んでいた。

立川には先端と保守を横断する異彩な風俗文化がある。ロバート キャンベルさんがその立川の国文学研究資料館館長に就任されたとき、まず口にされたのが「ないじえる芸

術共創ラボ」とそれに伴う、A-R（アーティスト・イン・レジデンス）構想だった。

「これね、知っている方は少ないんだけど。キャンベルさんが小声で言った。「国文研の地下には古典籍が六万冊あって……」まだ広くは知られていない豊饒な文化的地層を掘り起こし、現代の芸術で蘇らしたい。研究者のみならず広く国民に使うてもらいたい。A-Rとはあたかも資料館に住んでいるが如く日常的に芸術家を通い、古典籍に触れながら新しく文化を生み出すシステムである。そのアーティストを推薦してくれないかとのキャンベルさんの投げかけに、思い浮かんだのが劇作家で演出家の長塚圭史だった。

僕はそれまでの圭史の芝居を全て見ていた。

彼は文化庁の留学生として英国留学もしている。現代演劇の気鋭の演出家として言葉というものを縦横に生かし、世の中を刺激し続けている若き達人が、地下に眠る古典籍とどう格闘するか、どう遊ぶのか。自分の興味もあって彼の名前をあげ、圭史は文化庁でのA-R記者会見に臨んだ。

圭史が中央線で何度も足を運び、こらえたのが『KYODEN'S WOMAN ～アナクロニズムの夢～』である。

国文研の閲覧室を演劇空間に役者と観客が歩き回りながら展開する企画がコロナ禍のために朗読劇の上演となったが、戯作者山東京伝の黄表紙作品に刻まれた数々の言葉が目の前に現出し、戯作らしい柔らかいユーモアに小学生らしき女の子がケラケラ笑ったり頷いたりして、キャンベル館長が求めているのはまさにこれだと首肯した。

プロジェクト初回の打ち合わせ後、国文研の皆さんと立川の餃子屋（ぎょうざ天国）に行った。圭史と僕は出された餃子の異界的巨大さに眩暈を覚え（しかもお持ち帰り不可）、ビールに酔って中央線に乗り、そういえば圭史の劇団名が「阿佐ヶ谷スパイダース」だったと思いついた。そしてキャンベル館長の自宅も阿佐ヶ谷駅だとも。♪ああ中央線よ空を飛んで／あの娘の胸に突き刺され♪僕は友部正人の『本道』を口ずさみ、西から東へ文化が進むのもいいのだとひとりごちた。